

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 424 回 「ママ、また津波が来る……」

2011.6.19

あまりにも惨(むご)過ぎる記事である。(2011年6月13日 東京新聞)

……先月末に台風2号の大雨が被災地を襲った。

宮城県名取市の仮設住宅では屋根を打つ雨音が響いた。自宅が流された主婦さん(40)の次男(3つ)は「ママ、また津波が来る」と騒ぎ、パニックに陥った。(略)

さんは3月11日、大津波警報を知って海辺の自宅から次男と一歳の三男を連れ、小学四年の長男(9つ)を迎えに学校に向かった。校舎に着くと、「津波だ、上がれ」との声が聞こえ、校内に逃げ込んだ。

家や人をおみこんだ津波を見た三男は震災後、浴槽の水面が揺れるのすら怖がるようになった。おもちゃを浮かべ、気を紛らわせようとすると、激しく泣き叫んだ。今もシャワーで入浴を済ませる日がある。次男は気に入らないことがあると「津波で流されちゃえばよかったのに」とつぶやき、上着を脱いで振り回す。(略)

東日本大震災の津波で、濁流の恐怖を思い出して、今も風呂に入れない子どもたちがいる。他の仮設住宅でも、「小学生の男の子が赤ちゃん返りし、母親に甘えてばかりいる」「自宅を流された幼児がかばんに人形を詰め込み肌身離さず持ち歩いている」など、子どもたちの変化を心配する声が親たちから出ている。(略)

被災地でカウンセリングや講演を行っている早稲田大の本田恵子教授(教育心理学)は「特に幼い子は震災後、現実と過去の区別ができなくなっている。新しい記憶に塗り替え、恐怖心を乗り越えることが大切。大雨の時は天気予報を伝えて『津波じゃないよ』と声を掛け、プールはひざ丈の水で慣らしてほしい」と話している。……

災害も、戦争による乱世も、常に犠牲は子供達だ。

日本の将来を託すべき子供達が、今、苦しみから逃(のが)れられないでいる。

被災地や被災者に限らない、日本中の大人達は、全精力を挙げて子供達を見守って欲しい。子供達はあらゆる機会に、必死になってママやパパに救いを求めている。それは大人の常識や親の発想とは全く違ったやり方で、情報を発信し続けている。いかにも不器用で、すこぶる要領を得ない彼らのシグナルを、見逃さないで欲しい。彼らの目の高さで、正面から真っ直ぐ顔を見てやることだ。

心を思いっきり開いて、これ以上ない優しい言葉をかけてやることだ。

必ず手を握り、抱きかかえ、肌と肌が触れ合うしぐさを怠ってはならない。

それを一度や二度でなく、何回も繰り返し、耐えることなく続けることだ。

怒り、叱りつける事が今、この現場にはむいていない事、決して忘れてはならない。

親の子に対する愛は「無償の愛」であり「純粋な愛」である。

親が子に対して抱く愛は、言葉では言い表すことができない、「神の愛」の如く、純粋無垢で高貴なものだ。…思い出して欲しい。生まれたての我が子に寄せる慈(いつく)しみの親の愛、それは愛の極致とも言えるほどに崇高だったはず。

今こそ「親力」、救えるのはあなただけ。親であり、残念ながらカウンセラーではない。

子供は今日も、あなたの「至極の愛」を求めている。